毎日歌壇

水原 紫苑 選

恋といふことに気づかず暗殺者の蠍は永遠にオリオンを追ふ　名古屋市　浅井　克宏

〈評〉サソリはオリオンに恋していたのか。オリオンは気づいただろうか。ならば暗殺者サソリを送った女神は。

まな板に首を差し出す果実たち光と色を混ぜるよう切る　加古川市　石村　まい

〈評〉果実にはたしかに首がある。永遠に殺すことのないものたちの光と色。

ヤママユガをひとりで撫でた真昼間を思い出すカーネーションに触れて　東京　遠野　鈴

泥除けに飛翔と大きく書かれたるトラックはまだ空を飛べない　久留米市　春日　登

この星は息たえだえに回ってる僕は毎日たちどまってる　横浜市　安西　大樹

取水塔へ繋がる橋は錆びていて夕空が焼けるのを邪魔しない　長岡市　三月　とあ

死は嘘だ　五月のガラス瓶のなか寺山修司を殺さねばならぬ　雲南市　熱田　俊月

天国の傍聴席を縫う朝陽　おとうとの背の細く薄くて　東京　境　千尋

三日月の曲率に沿うようにして答えた僕は問いを忘れる　所沢市　里見　脩一

信じても信じなくても光満つるルルドの泉の水を汲みにき　東京　福島　隆史

伊藤 一彦 選

「いつもありがとうございます」と言われても私のいつもは半額タイム　春日市　伊藤　亮

〈評〉物価高でスーパーの値引きタイムを利用する人は多い。ユーモラスに歌われているが、今の暮らしの様を鋭く歌う。

老人が歯を食ひしばり大雨にウーバーとして自転車を漕ぐ　市川市　岡本　恵

〈評〉大雨の降るなか目にした老人の配達員。「歯を食ひしばり」に訴えがある。

代々の魚屋やめてコンビニとなりしに今やきれいな更地　東京　斑山　羊

割り損ねた割りばしみたいな恋でしたささくれ指に刺さる「さよなら」　宮崎　門田　藍子

愛されてぼろぼろになるぬいぐるみ　愛されなくてぼろぼろのぼく　熊本市　夏風かをる

はじめから大きな骨の除かれた干物を喰いあうような婚活　富士見市　松本　尚樹

曽祖母が憧れていた特攻の少佐の名前やっと分かった　群馬　金子　歩美

原発のゴミを捨てさせるんですか？　自らの子に孫に曽孫に　雲南市　熱田　俊月

人間を育む仕事が軽くなる保育現場のスポットワーク　鹿嶋市　大熊佳世子

拉致されし娘を待つ母もいる国の花屋の前は客で賑わう　新発田市　飯田　英範

米川千嘉子 選

母の日のピンクの薔薇を鬱病の母はこまめに水切りをする　千葉市　佐藤　綾子

〈評〉日ごろ自分を気遣ってくれる娘への感謝のように、バラを大切に扱っている母。そんな母の思いも作者は見逃さない。

鯉幟泳がせるため青竹の吟味を尽くし担ぎ来る祖父　西海市　まえだいっき

〈評〉家を継ぐ男児への期待と共に大空に泳いだこいのぼり。三、四句の具体がいい。

居酒屋で出会えていたらきみの背をさすりたくなる供述だった　四日市市　早川　和博

運動会で駆けまわりいる園児らよ故郷の地に幾人残る　須崎市　野中　泰佑

眼科医は日に二百個の目と遭って百個の不安なこころと話す　浜松市　久野　茂樹

もう一度掬えば破れるポイを見る金魚はわたし祭りは終わる　三重　中山由賀子

じっくりと役員選ぶわが村のコンクラーベは恒例行事　新発田市　飯田　英範

手を振って試験場へと歩み出すきつくまとめた髪は揺れない　横浜市　友常　甘酢

いぬふぐり・きつねのぼたん・からすうり　近くにいるよ野原の動物　島田市　渋谷　玲江

広大な田は広大な池となりにごりて田植え待つばかりなり　上越市　戸枝　誠

加藤 治郎 選

起きぬけのパジャマの胸のポケットにまだ眠そうなヒツジがいる　仙台市　石川　初子

〈評〉眠れないときには「羊が1匹」と数える。ところが眠った後に帰らない羊がいた。短い物語として楽しい作品である。

全員が空飛ぶ車で飛んでいる空にはきっと自由は無いね　広島市　堀　眞希

〈評〉空飛ぶ車が空を埋め尽くす日が来るだろう。どうなるか。文明批評である。

ならばもしあの日電車に飛びのってあなたにあえばしたたるからだ　兵庫　廣澤　真希

木を本に日を目に変える横棒の力いっぱい生きてるんだな　東京　稲山　博司

知らない子いなくなったら後はみな友達だという小さな輪のなか　芦屋市　中谷　貴之

どうしますか？と訊かれたときにまっすぐに行き着く言語野がずっと躁　平塚市　芝澤　樹

ところどころ電車が遅れてたからはやく来れたよ、という。哲学の朝　入間市　星　ひなた

やめて、もう指揮棒なんて振らないで　テンポ・プリモでテンポ・プリモで　横浜市　砂月　七

触れないでいたことついに口にしてわたしは見ないあなたの眉間　広島市　宮田　実来

僕がそう望めば海にもすぐ行けるという事実がちいさく光る　名古屋市　森本　有

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます

（おことわり）次回は10日に掲載します。